

異文化教育導入時における学生の意識調査とその利用

保坂律子

关于导入异文化教育时学生的意识调查及利用

Statistical Study on the Effect of Introductory Education of Intercultural Communication

Ritsuko HOSAKA

要旨

从呼吁国际化，到到处可以听见“全球化”这个词时间已经不短了。不管是去进修语言、还是去观光旅行，现在很多大学生在在学期间开始走出国门，至少有了接触“异文化”的机会。另外，近年来大学里关于“异文化”方面的教育也开始盛行。但是，说是异文化教育，具体教什么怎样教，一般都交给教员自己来定。介绍所研究国家的文化、历史、地理等等，内容形式各种各样。本文利用导入异文化教育时学生的意识调查，根据调查结果思考异文化之间的各种问题，对教什么内容才能加深异文化之间的理解提出了一个建议。

0. はじめに

国際化が声高に叫ばれ、グローバルゼーションという語がいたるところで聞かれるようになって久しい。語学研修であるにせよ、観光旅行にせよ、現在では多くの大学生が在学中に海外へ出かけるようになり、少なくとも「異国の文化」に触れる機会を持つようになった。また大学の講義でも近年「異文化」教育が盛んになっている。しかし、異文化教育と言っても何をどう教育するかは、教員の裁量にまかせられ、対象とする国の文化の紹介や歴史や地理など扱う内容はさまざまである。本論は、異文化教育導入時における学生の意識調査を利用し、その結果を基に異文化間の諸問題を考え、異文化間の理解を深める講義内容を提案するものである。

1. 外国語教育と異文化教育との差異

初めて異文化を体系的に学ぶ学生に必要なものは「学ぶ」意欲と、異文化に対する問題意識

であろう。それらが欠如すれば、単に聞き流すだけの授業になってしまうからだ。これが、語学であれば、学ぶ目的意識はかなりはっきりしている。保坂2003の調査ですでに明らかにしたように、本学においては中国語履修者の半数は「中国語に興味がある」ことを学習動機にあげ、学習目標を「日常会話ができる」「中国旅行で使える」と定めている学生が75%を占めている。このように語学の学習は、旅行や就職など、具体的な履修目的がはっきりしているのに対し、異文化を学ぶ動機は知的好奇心にたよるのみである。本年度講義開始時での調査⁽¹⁾では「異文化の授業を全部とってみたい」「アジアを扱っている授業がこれだけだから」、「中国が熱そうだから」や「先輩がおもしろいからと勧められた」、「中国語も履修しているから」などと実にさまざまである⁽²⁾。したがって如何にして学生の興味を引き出すかが講義の際には特に重要となってくる。

「異国の文化」と「異文化」

ところで、異文化には「日本と外国の文化の差異」と、「外国間の文化同士の差異」との2つがある。おそらく日本と外国の文化の差異について、日本人学生は日ごろ考えたことがないのではなかろうか。先にふれた海外への語学研修や、観光旅行は、往々にして「異国の文化」として捉えがちで、当該国の文化と日本の文化の差異を考えるにはなかなか至らないように思われる。加えて、日常生活の中でも日本や日本文化、さらには日本人としてのアイデンティティを意識することはほとんどないように見受けられる。なぜなら、日本人は同じ文化をもつ人に囲まれ、ほぼ単一な民族であるため、全員が均質なバックグラウンドを持つことに何ら疑問を感じることもなく、皆同じであることが無意識下で前提になっているからである。文化の違いを考えることも、自分の民族を意識する必要もない。そのため、自身の文化の特徴を理解せずにおいてもコミュニケーションに不都合を感じない。外国の文化間の差異になれば、さらに日常では疎遠となっていることは想像に難くない。

「日本人学生の持つ中国人像」

中国に住む中国人と、米国に移住した中国人やその子孫である華僑⁽³⁾や華人⁽⁴⁾で、アメリカ国籍を持つ生まれも育ちも米国の二世以降では文化は異なっている。さらに言えば、中国に住む中国人には人口12億人の漢民族のほかに、全人口の8%である1億人を占める55の少数民族がいる。しかしこれまで筆者が接してきた日本人学生は、容貌が「中国人」であれば、中国に住んでいようが米国に住んでいようが、十把一絡げに「中国人」としてとらえ、等しく中国的文化習慣を持っていると考えて疑わない。たとえば、サンフランシスコのチャイナタウンや横浜中華街に住んでいれば、やはり中国文化の中で育つ中国人と考えている。理由を尋ねると、

「春節と呼ばれる旧正月には、海外のチャイナタウンの様子は必ず日本のテレビニュースでも紹介され、そこでは邪気をはらうという爆竹が鳴る街角の様子や、赤や金色の年画や春聯で飾られた戸口が映し出されているではないか」という。このように自分の目に入る僅かな情報をすべての判断の拠り所としている。そこには何ら統計的なデータや、客観的な根拠はない。

一方で日本人学生がイメージするアメリカ在住の日本人とは、仕事や留学目的で住んでいるか、或いは配偶者が外国人であるかの場合が大半であろう。そしてそういった人たちは海外に在っても日本語を話し、茶碗や箸で日本食を食べ、日本風的生活習慣を失ってはいない。

「定住の自覚」

海外に住む多くの中国人と日本人の差異は、真に海外に根をおろし定住する覚悟を決めているか否かの差であろう。仕事であれ留学であれ、日本人は目的を達したら、また日本に戻るか、そうでなければ、日本に足場を確保しつつ海外生活を送る。しかし中国人は社命を帯びての滞在や留学を除けば、米国に住む中国人は米国に生活の拠点を置き定住し、次の世代は彼の地で生まれ彼の地を母国として育つことが多い。誤解を承知で言えば、中国人は中国から米国に飛び込んだ移民であり、日本人は日本に戻る高級出稼ぎの感覚に近いであろう。

ところで中国国内のビジネスの場では、米国生まれの米国育ちの米国籍で、MBAを持つエリート中国人系アメリカ人が多数活躍している。彼らの姿形は中国に住む中国人と同じでも、彼ら自身はアメリカ人として育っており、中国本土で生まれ育った中国人とは全く文化を異とするため違和感を持ち、文化摩擦やカルチャーギャップを強く意識しながらの滞在になっている⁽⁵⁾。しかし、日本ではそのような例はまれである。海外で活躍する日本人が仕事で日本に

やって来ても、あるいは一時帰国しても文化は日本をベースにしている。このように、日本では異文化との日常的な直接接触と、異文化理解の必要性がないため、「異国の文化」ではなく異文化授業に学生を引き込むのが難しい。

2. 講義開始時における調査

1. で述べたような筆者の仮説を検証するため、講義開始時にいくつか学生にアンケート調査を行った。まず自由記入で調査した履修目的は、初級中国語が比較的明確であるのに比べると、異文化の履修目的は先に述べたように様々で、明確な傾向はみられず曖昧であった。

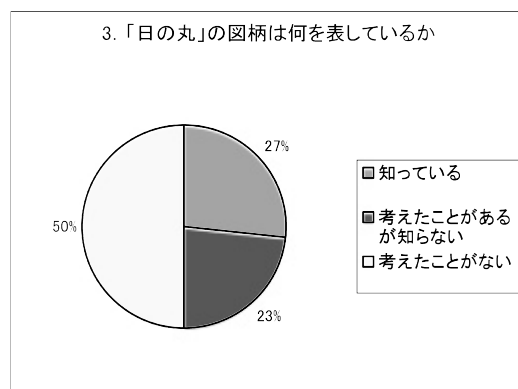
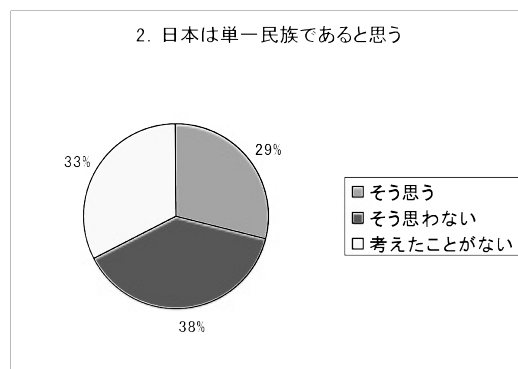
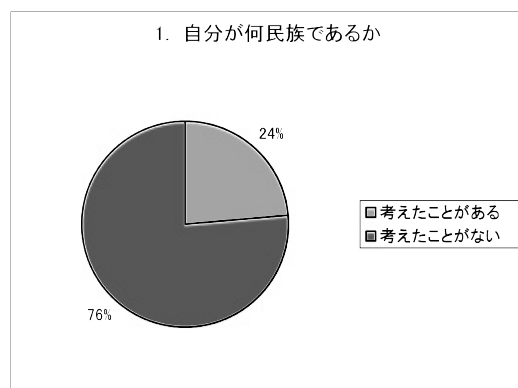
2.1 アイデンティティの自覚

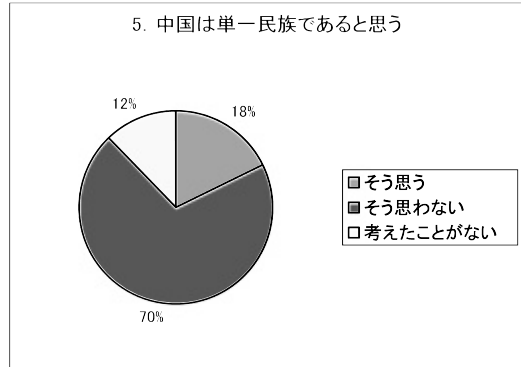
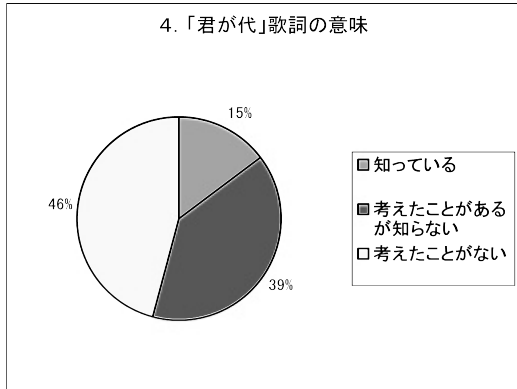
次に、日本人としてのアイデンティティの自覚に関するアンケートをとった。日ごろ、自分自身について思いをめぐらせることがあるのだろうか。アンケート項目は次の4点である。

1. 「自分が何民族であるか」考えたことがあるか
2. 「日本人は単一民族であると思う」か
3. 「日の丸は何を表しているか」知っているか
4. 「国歌の歌詞の意味」を知っているか

1の結果からは「自分が何民族であるか」を考えたことのない学生が4分の3以上いることが明らかになった。この調査項目は、自分が何民族であるかの答え⁽⁶⁾は問題ではない。民族を自問することがあったかどうかポイントである。結果は20歳前後になるまで、自分が民族を考える必要がない環境で生活してきたことを明示している。2. 「日本人は単一民族であると思う」では、「考えたことがない」、「そう思う」「そう思わない」がそれぞれ約3分の1ずつであるが、調査時まで考えたことが無かった学生が、調査時に「そう思う」、「そう思わない」の何れかを選択した可能性を考え合わせるならば、「こ

れまでは考えたことがない」学生の割合は、数字に表れた以上に高いと思われる。さらに3の「日の丸」の表すもの⁽⁷⁾では、半数が「知らない」と答えている。4. 「君が代」の歌詞の意味については46%が「考えたことがない」と答え、39%は「考えたことがあるが知らない」と回答している。「考えたことがあり、知っている」の





はずか15%である。これらの結果から、学生は日ごろほとんど日本人と民族、また日本のシンボルについて考えたことがないことが見て取れる。

2.2 日本人学生が考える「中国人」

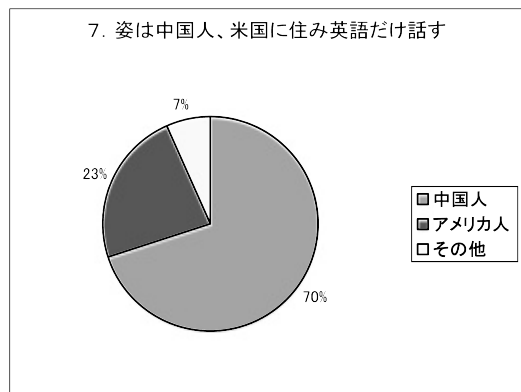
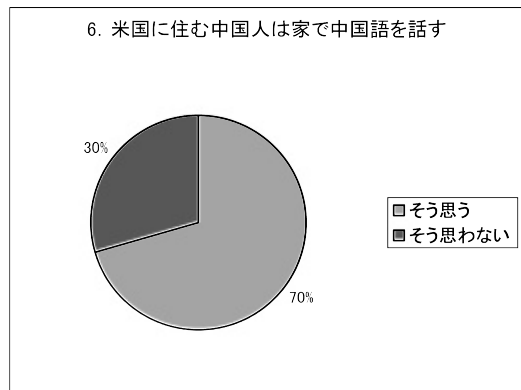
次に、日本人学生が中国人をどう捉えているのかに関するアンケートをとった。調査項目は3つである。

5. 「中国人は単一民族である」と思うか

6. 「米国に住む中国人は家で中国語を話す」と思うか

7. 「姿は中国人、米国に住み英語だけ話す」と思うか

まず、5. 「中国人は単一民族である」という調査項目については7割が「そう思わない」と答えている。「そう思う」が18%、「考えたことがない」が18%であった。日本で紹介される中国各地の映像やニュースから、あるいはかつての満州が満州民族の名前に由来することや、中国地図には5つの自治区があるという程度の知識のいずれかがあれば、そうでなくても単に中国の13億の人口を考えれば「単一民族ではないだろう」ことは想像可能だろう⁽⁸⁾。6. 「米国に住む中国人は家で中国語を話す」については7割の学生が「そう思う」と答え、「そう思わない」と答えた3割を大きく上回っている。「中国人」



であれば、中国語を話せるとの思い込みがあるようだ。また7「姿は中国人、米国に住み英語だけ話す」人は、「中国人」だと思える学生が7割、「アメリカ人」だと考える学生23%であった。7%の学生が「その他」として「国籍を聞いてみる」と答えた。7の結果からは、たとえ中国語が話せず、英語のみで生活していても、

外見「姿・形が中国人」であることで中国人と判断する日本人学生が大多数であることがわかる。

2.3 海外居住の中国人像と日本人像

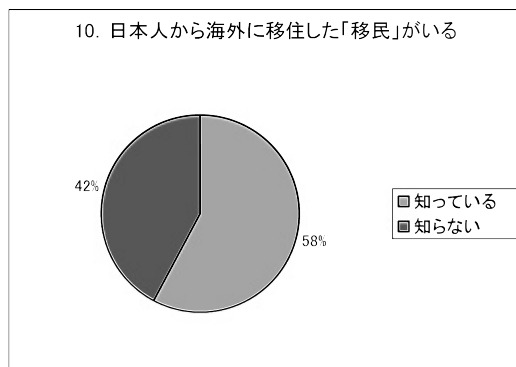
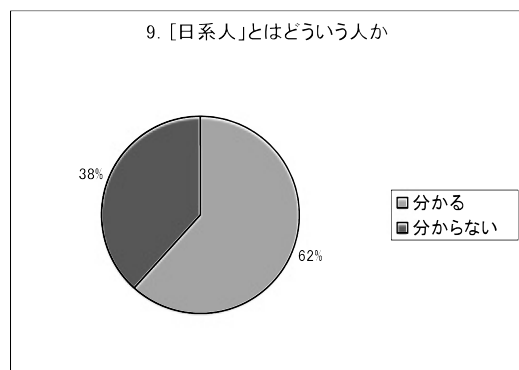
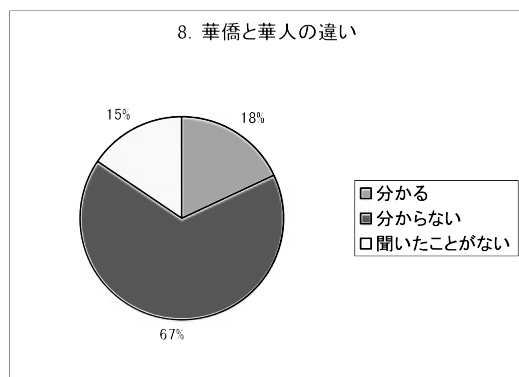
海外に住む中国系外国人をさす「華僑」という言葉は、日本では比較的耳にする機会が多いと思われる。ここでは海外に住み現地の国籍を持つ華人と、同じく海外に住みながら中国籍を保持している華僑との違いの理解について調査した

8. 「華僑と華人の違い」

9. 「日系人とはどういう人か」

10. 「日本から海外に移住した移民がいる」

8. 「華僑と華人の違い」については「分かる」が18%、「分からない」、「(華僑と華人の語を)聞いたことがない」を合わせると8割を超え、海外に住む中国系外国人の存在を知らない、あ

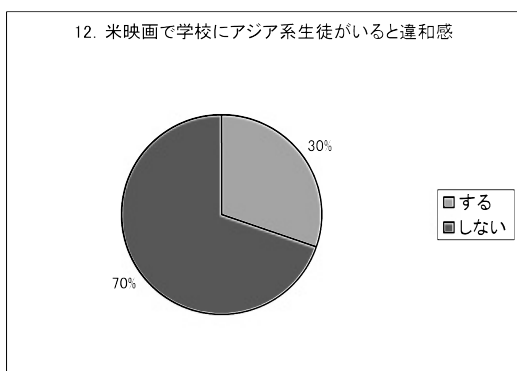
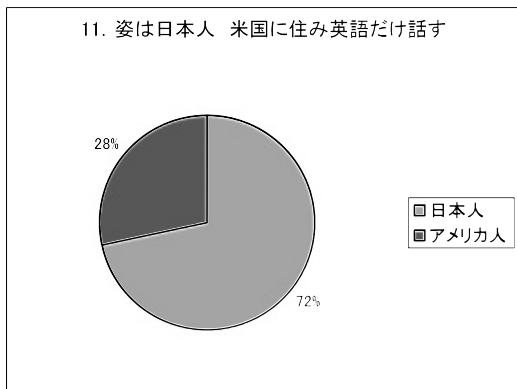


るいは関心を持ったことの無い学生が多いことがわかった。一方8と関連して9. 「日系人とはどういう人か」について調査した結果、「分かる」が6割を超え、「分からない」と答えた38%を大きく上回った。10. 「日本から海外に移住した移民がいる」についても、9とほぼ同様に「知っている」と答えた学生が6割弱であった。これらの調査項目では学生にその移住先は問題にしてい

2.4 外見優勢の法則

2.3で日本人学生は外見「姿・形が中国人」であることで中国人と判断する傾向が強いことを明らかにしたが、ここではさらに「姿・形が日本人」の場合について調査した。

11. 「姿は日本人、米国に住み英語だけを話す」人は「日本人」だと考える学生は7割以上で、ほぼ7と同様の結果が得られた。これらの結果からは、日本人学生は、「どこの国の人か」を判断する基準は、姿・形、すなわち外見で判断する「外見優勢の法則」の支配が強いことが分かった。ところが12. 「米映画で学校にアジア系生徒がいると違和感」が「しない」学生は7割に達し、違和感が「する」学生の3割を大きく超えるという結果が出た。日本人学生は「外見優勢の法則」傾向が極めて強いにも関わらず、この結果となったことは次のように考えられるのではないか。すなわち米国で実際に「姿は中国



人で英語のみを話す」人に会うことは仮定であり、実際には未経験である。また仮に実際に米国に行ったとしてそのような人に会う可能性より、実際に「映画の中」で「米国の学校にいるアジア系生徒」にははるかに多い回数、出会っているから、というものである。

3. 調査結果の講義への利用

以上のような学生の異文化に対する意識をふまえ、筆者の講義の第1回、第2回、第3回で、日本文化の特徴と、中国人間の文化の違いを講義テーマとして取り上げた。「国家シンボル」、「多民族国家中国」、「華僑と華人」である。これらの内容が学習意欲に影響をもたらすか確認するため、講義後に新たな発見や、意見、感想などを10分間で記入してもらい、翌週にトピックとして取り上げていった。

3.1 「国家シンボル」

まず始めに、国の象徴である「国家シンボル」として、中国の①国旗(五星紅旗)⁽⁹⁾、②国章(国徽)⁽¹⁰⁾が表すものや、③国歌(義勇軍行進曲)⁽¹¹⁾の成立の由来や歌詞についての説明をし、続いて④国花や、⑤天安門や天安門広場の成立の歴史、⑥中華民族のシンボルとされる竜にまつわるモチーフなどについて筆者撮影の写真利用のスライド配布資料を使って講義した。また③国歌については実際にCD⁽¹²⁾で中国、日本、アメリカ、韓国の国歌を聞かせた。この講義後に学生に提出してもらったカードに記載された内容で、特に目立ったのが①の国旗、③国家に関するものであった。

3.1.1 国旗「日の丸はいったい何を表すのだろうか？」

- ・中国の国旗には色も5つの星も星の大きさにもちゃんと意味がある。
- ・5つの星が「中国共産党指導下、人民の大団結を象徴している」ことが分かった。
- ・日本の中央の大きい星は中国共産党、周りの小さい4つの星が中央の星が大きいことも分かった。
- ・国旗の赤は「革命を象徴」しているというが「日の丸」の赤は何を表すのか。

これらのコメントは「では、日の丸はいったい何を表すのだろうか？」という疑問に結び着いていった。

3.1.2 国歌「君が代の歌詞はどういう意味だろうか？」

今年度は、履修者の中には中国人留学生が10名いる。彼女たちは中国で国家を歌うときの姿勢を実演してくれた。「小中学生は手のひらを外にして右頭上に、軍人は軍人の敬礼の仕方です」というもので、これは学生の興味を引いた。

- ・義勇軍行進曲というは、自分たちの国が誕生する時の歌なのだろう。

- ・革命の歌だから、怖い。歌詞が過激だと思うが、こうやって国ができたのか。
- ・アメリカ国歌も、フランス国歌も国歌として独立するときの歌詞なのだろうか。
- ・行進曲というくらいだから、テンポがよい。
- ・歌詞は血なまぐさいが、手に力こぶを作りたくなるような、ファイトが沸く曲だ。

そして、いずれも「君が代」の歌詞はどういう意味なのか「革命の曲ではないのだろうかあか」という疑問に結びつく。さらに、「日本では「歌う、歌わない」の問題があるのに、中国は皆がちゃんと敬意を表していることに、国民の団結を感じる。」という意見も出され、「日本の国歌の訳が分からない」のように、歌詞をまるで外国語のように感じている学生もいることも明らかになった。「小さい頃は、お相撲の歌⁽¹³⁾だと思っていた、のんびりした曲だから」というコメントもあった。また、履修者中の留学生からは、

- ・国旗の星の中央以外は忘れかけていた。もう一度確認できてよかった。
- ・中国といってもモンゴル自治区出身なので、首都北京のことは（先生より）知らなかった。という率直なコメントが出され、日本人学生との話が弾むきっかけとなった。

3.2 「多民族国家」

第2回では「多民族国家中国」というテーマを取り上げた。ここでは①中国の少数民族⁽¹⁴⁾について、全13億の総人口の92%にあたる12億が漢民族、人口の8%にあたる1億人が漢民族以外の55の民族であること、最大人口は約1500万人の壮（チワン）族であること、これは東京との人口1200万人よりはるかに多いことをはじめ、対して、民族でいること、②民族区域自治制⁽¹⁵⁾と民族自治区面積が国土の6割強であること、③チベット自治区、④少数民族の人口政策⁽¹⁶⁾などを中国の人口とからめながら解説した。講義

では配布資料とスライド、および「中国を知るビデオ」⁽¹⁷⁾を併用した。この講義後に学生に提出してもらったカードに記載された内容で、特に目立ったのが次のようなものである。

3.2.1 多民族「民族を考えるきっかけ」

- ・日本人には民族というものがあるのだろうか？
- ・これまで全く、民族なんて考えたことがない。他の国の人は民族について考えているのだろうか？
- ・ニュースで「民族紛争」という言葉を耳にしたことがある。中国でもあるのだろうか？

これらの疑問から「自分もどこかの民族に所属しているのか？」「人はすべてどこかの民族なのか」と民族を考えるきっかけが生まれたことが分かった。

3.2.2 「少数たる所以」と「民族数の多さ」「人口の多さ」

- ・民族が56もある。少数民族といっても人口の8%で1億人、ほぼ日本と同じだ。
- ・少数民族の最大人口の少数民族である壮（チワン）が1800万人。
- ・日本では人口100万未満の県が7つもあるのに、これらの県の人口より多い少数民族が18もある。これはもはや少数ではない。
- ・漢民族に対しての数で少数と呼ぶ中国の人口に圧倒された。
- ・少数とは遅れた未開の土地のイメージだが、大都市の住民にも少数民族がいる。

これらのコメントから「少数民族などと言うものだから、数十人からせいぜい一つの村の人口かと思った」ら、「日本では一つの県に相当する人口であっても少数民族」であるが、なぜ少数というのか少数たる所以を知ること、改めて中国の大きさを思う学生は多い。

3.2.3 多民族国家をまとめる苦勞

- ・住まいの形態も、食習慣や祭礼など生活様式

も違う民族を一つの国としてまとめる中国政府は大変だと思う。

- ・国境付近に民族自治区が多いと目が行き届かないことはないのだろうか。
- ・日本は一つの民族であるし、周囲を海に囲まれていて、陸続きの国境がないことはとても大きなメリットだ。紛争が起こりにくく日本は治めやすい。
- ・少数民族に色々な面で優遇政策をとっていることは、民族紛争を避けるための方策か？
- ・自治を認めるということは、中央政府との信頼関係が必要だろう。
- ・少数民族は厳しい制限で有名な一人っ子政策の例外⁽¹⁸⁾であることを知った。漢民族からは嫉妬されないのだろうか？

これらのコメントは、日本は多民族をまとめる苦労や民族間の国内での紛争とは無縁な恵まれた国なのではないか、さらに陸続きの国境が無いことは島国のメリットという意見に発展した。さらに中国人留学生からは

- ・自分は朝鮮族だが、朝鮮族が中国に200万人もいることは知らなかった。
- ・中国人でも全民族の名前をなかなか言えない。学ぶべきことは沢山あると思う。
- ・授業を受けて、これだけ多くの民族がいる中国人であることを誇りに思う。
- ・叔父は蒙古族、祖母は満族、父は錫伯族で、私は錫伯族だが、漢民族と一緒に生活しているので自分がどちらの民族かわからなくなる。というコメントがあり授業で紹介したところ、それまで「少数民族は山の中にひっそり暮している」などと思いこんでいた日本人学生も、身近に何人も少数民族の中国人留学生がいることを知り、一層関心が高まったようである。

3.3 「華僑と華人」

先ず①華僑と華人の定義、②華僑の発生⁽¹⁹⁾と中国人意識、③華僑・華人の状況の変化、④社

会主義化と華僑・華人、⑤新華僑⁽²⁰⁾と海亀派⁽²¹⁾などの解説を配布資料を使用し解説したのち、「海外の華人」⁽²²⁾の録画ビデオを併用して講義をした。

3.3.1 民族とアイデンティティ、外見と国籍

- ・日本に住んでいると、民族も国籍もアイデンティティを考える機会も必要も無いよう思う。これを機会に考えてみたい。
- ・母国を離れて生活すると、母国を客観的に見られるだろう。
- ・他国で生まれ育ち、その国に溶け込めば溶け込むほど、その国の言葉や気質が身につく。中国に行き、外見や流れる血に共通するものがあっても、言葉や生活習慣、社会環境によって、自分は外国人だと感じる中国系米国人はそれで幸せなのだろうか。
- ・日本人も見ただ目で「～人」と決め付けられない習慣をつけたらよい。一種の人種差別だ。
- ・チャイナタウンにいる人は全部中国人だと思っていた。アメリカ国籍なのだろうか。
- ・共感した部分がある。私は見かけも国籍も名前も日本人だが、父がフィリピン人、母が日本人のハーフ。言葉も日本語しか話せないが、フィリピンの人に最近、「あなたはフィリピンの血が入っていますか」と聞かれた。ルーツを考えるようになった。
- ・人種差別は黒人が受けるものと思っていた。中国人も受けるのだ。
- ・移民先の国と中国が戦争になったらどうするのか。昔、朝鮮や台湾の人が「日本人」として戦争に参加したというが、かわいそう過ぎる。
- ・私はどうしても外見で「～人」と決めてしまう。直す方法はないのか。
- ・国籍は「なに人」であるか判断するひとつの基準となることを学んだ。ここでは「～人」というのは、血を引く民族

が優勢なのか、それとも国籍が優勢なのかについては議論が分かれた。これらをはじめとする多くのコメントは、ここでは、日本人学生を持つ「外見優先の法則」への反省と、民族や祖国、国籍、自分たちの「アイデンティティ」を考える大きなきっかけとなった。

3.3.2 華僑と華人、移民の苦勞

- 中国人に移民がいたことを知らなかった。
- 華僑と華人を混同していた。海外に住んでいる中国人に国籍上の区別があることを初めて知った。
- 中国にいつ何が起こったのか、資料の年表で流れを見ながら、日本、世界の出来事と比べたら、華僑の発生がより分かりやすく理解できた。
- 華僑の発生原因は戦争で失業が増えたからだ。当初は出稼ぎだ。それは、たぶん日本の東北地方の人が冬に東京に行ったのと似ている。華僑も出稼ぎ先のほうが中国よりも稼ぎが多かったのでは、戻るのも躊躇うのがわかる。その替わり祖国の発展を願し、送金をし、愛国心が芽生えたのではないだろうか。
- 19世紀当初の目的は出稼ぎで、慣れない北米ではさぞ大変だったろう。安い賃金で使われたかもしれないが、その中で故郷へ送金することによって、中国と繋がっている気持ちが保たれていたかもしれない。
- 華僑や華人は中国と母国と自分の生まれ育った国の歴史を対比して見るに違いない。
- 「日系人」とはどういう人達かよく分からなかったが理解できた。日本にも移民はいた。
- 華僑はしっかり商売をして成功しているように見えるが、祖国を離れて暮して昔は差別もあって大変だったろう。その苦勞が子供にしっかり教育を受けさせることにつながったのではないだろうか。
- 移民当初は異郷での生活のため、各種の団体

を作って支えあった。そのため中国人同士の結束が固いのだと思う。

- 移民初期の辛い気持ちが、子供に高等教育を受けさせる原動力になっているようだ。
- 自分は自分が住む国の人間だと思っていても、やはり外見で判断する人はいることが分かった。中国系英国人が、バスで白人、中国人、黒人の隣の順にバスの席が埋まっていくのを知って、自分が中国系英国人であることに苦悩し、どこにアイデンティティを求めるか悩んでいたのを見て、多くの中国人も苦勞して来たのだらうなと思った。

ここでは、なぜこれまで日本人学生が知らなかった海外に住む華僑の歴史、海外に住む中国系外国人の苦勞と、さらに日本人移民にも関心を向けるきっかけに繋がった。

3.3.3 華人の変化「新華僑」「海亀派」

- 留学後、留学先の先進国に定住している新華僑、それも高学歴のエリートが47万人もいるとは驚くばかり。
- 改革開放政策で、出国が増え、海外に定着した新移民が100万人で、半数は家族や親族を通じての移民だそうだが、学歴が低くて言葉に苦勞している人が多い。このような人は飲食店やサービス業、縫製工場などで働き、成功者とはいえない。一方、留学後その国に定住した新華僑は高学歴で成功している。こんな両極端の人がいていいのだろうか？
- 中国政府は海外先進国で成功した新華人のために特惠条件を制定したので、中国へ帰国する人が増えているという。恵まれた現状から、体制も異なる中国へ戻るのはえらい。現在の暮らしが豊かであれば「祖国のために力を尽くそう」と私は思わない。愛国心が強いからだろう。中国人としてのアイデンティティは強いのだろう。
- 中国は学歴格差が大きいことを知った。海外

の名門校に通っている人に中国系が多いことにとっても驚いた。上位を占め、その上学位を2つも3つも取っている。

- ・アメリカ映画の学校の中に、アジア人がいるのが不思議な気がしたが、それは中国系アメリカ人だったのだろう。なぞが解けた。
- ・海外にいても、中国人としての誇りを保ち、祖国の発展を強く望み、愛国心が強い中国系アメリカ人が多い。日本人には祖国(?)の発展を望み、愛国心を持っている人がいるのだろうか?比較してみたい。
- ・中国から先進国へ行き定住し、成功した人が中国へ戻り自国のために力を発揮するのはよいと思った。海亀は産卵の時には、生まれ故郷に戻ってくることから、海外から帰るという音をかけて、そのような人を、海亀(帰と亀は同音)派と呼ぶのもうまい。
- ・中国系の人たちはアジアにいるもの、ヨーロッパにはあまりないと勝手に思いこんでいた。欧州にも定住していることを知った。

このように海外で成功した高学歴の新華僑と呼ばれる人の中で、中国に戻り新たに活躍する海亀派と呼ばれる人が現れたことに対し、日本人学生からは賞賛の声が多かった。また、日本人なら、定住先の生活を捨てて日本の発展のために戻るかどうか、愛国心との関係はどうかという話題に発展した。

また、中国人留学生からは

- ・華僑は祖国の発展を強く望み、祖国の建設に積極的に参加している。私もこの大学を卒業したら一日も早く帰りたい。
- というコメントがあった。

4. 結び

筆者は異文化教育導入時に学生の意識調査を行い、まずその結果から日本人学生が日ごろ直接接しない異文化間のテーマを取り上げて講

義を行った。そこでは各国の国旗や国歌に込められたもの、民族に関わる問題、国籍とアイデンティティ、移民の歴史と苦労などを学ぶことによって、「異国の文化」から「異なる文化を持つ国」という視点で中国を、あるいは他の国を捉え始めるように道をつけることができたと思う。これまで他国と対照して日本を考えることがなかった学生が、日本と中国を対照して考えるきっかけを得たことで、非常によい反応を示したからである。今後の異文化教育の授業では、学生が持ち始めた異文化に対する関心を踏まえ、異文化間の理解を深めることができるよう、日中両国の文化をその成立の背景などに留意しつつ比較対照し、あるいは相互影響を考慮しながら講義を展開して行きたいと考えている。

《参考文献》

坂本律子2003『中国語学習目的・意欲の変化に関する調査研究』駒沢女子大学研究紀要第10号

1996相原茂編著『中国語学習ハンドブック改訂版』大修館書店

1999天児慧ら編『岩波現代中国事典』岩波書店
中国総合データ <http://searchina.ne.jp/basicguide/005.html>

中国情報局 <http://serchina.ne.jp>

中国まるごと百科事典 <http://www.all-chinainfo.com>

人民網 <http://www.people.ne.jp/>

《注》

- (1) 履修登録者は日本文化学科、国際文化学科、人間関係学科の2～4年生計200名だが、アンケート調査は有効回答計149名である
- (2) 「試験がレポートだから」、「時間割があったから」などという消極的理由。
- (3) 中国国籍で、他国に住むもの。現在は少数

- (4) 居住国の国籍を持つ中国系市民。* 1978年以降の出国者は新華僑（後出）と呼ばれて区別されている。
- (5) NHK ワールドレポート「海外の華人」1999.4.20
- (6) ここでは答えは問題にしていない。何が正解であるかにも言及していない。
- (7) 太陽を表しているとされる。http://ja.wikipedia.org/wiki/アンケートでは「日の丸」が表すものが何であるかには言及していない。（学生自身が知っていると考えているかどうかのみを問題にしている。）
- (8) 実際の少数民族の数についてはここでは問わない。
- (9) 五つの星は「中国共産党指導下、人民の大団結を象徴」し、地の赤は「革命を象徴」、中央の星「中国共産党」、4つの星「労働者、農民、都市小資本家、愛国的資本家」を表すとされる。
- (10) 五星、天安門、麦の穂、歯車をイメージ。
- (11) 中華人民共和国国歌、田漢作詞、聶耳作曲
- (12) 『世界の国歌』2000キングレコード。
- (13) 大相撲の表彰式で流れる。
- (14) 全人口の8%約1億人、55民族、その内100万人以上の人口がある民族：18民族（日本の100万人以下の都道府県は7つ）、最大人口は約1500万人の壮（チワン）族。
- (15) 非漢民族に地域を画定して自治を与え、単一国家に統合する方式。
- (16) 少数民族を対象とした人口政策上の特例的諸政策。①一人っ子政策の対象外（壮族を除く）②上級学校進学に際して有利な条件③就職時に優遇④民族によっては住宅供給、生産資材の優先購入特典など。
- (17) 朝日出版『中国を知るビデオ・多民族国家中国』
- (18) 最大の少数民族である壮（チワン）族、一人っ子政策の対象となっている。
- (19) 1860年～1941年に大量移民が発生。ほとんどが福建省と広東省から。古くから海へ出て漁業や貿易に従事するものが多かったが、19世紀以降戦乱が続いたため失業が増大、出国を促す要因になった。一方東南アジアや北米では経済成長のため大量の労働力需要が発生した。
- (20) 1978年から始まる改革・開放政策で緩和された海外渡航規制によって出国し、海外に定着した新移民。
- (21) 海外に留学し、研究や仕事での成功経験を持ち、その後中国へ帰国した高学歴の々のこと。もともと海外からの帰国者は「海帰派」と呼ばれていたが、故郷に戻る海亀になぞらえ、四声も含めて発音が全く同じ「ハイ・グイ・パイ」(Haiguipai)の「海亀派」の漢字が用いられるようになった。
- (22) NHK ワールドレポート「海外の華人」1999.4.20